第 13 回上伊那総合技術新校再編実施計画懇話会

日時：令和５年９月 11 日（月）
18 時～19 時 30 分
会場：ニシザワいなっせホール

次 第

１ 開　会

２ 挨　拶

３ 会議事項

（１）第 12 回上伊那総合技術新校再編実施計画懇話会まとめ　【資料１～３】

（２）学校像のイメージ（案）について　【　資料４　】

（３）上伊那地域の中学校卒業予定者数の推移
と新校の募集学級数、開校年度の考え方について　【資料５～６】

（４）校地検討会議からの報告　【　資料７　】

４ その他

５ 閉　会

資料１

第 12 回　上伊那総合技術新校再編実施計画懇話会まとめ（案）

日時・会場	令和５年（2023 年）６月 19 日　18 時 00 分～19 時 30 分　ニシザワいなっせホール
出欠席	懇話会構成員：出席者 27 名、欠席者７名 （浦野邦衛、山下政隆、篠平良平、小河節郎、城取　誠、宮下陽子、平沢　一） 事務局：県教委３名（中島主幹指導主事、田中主任指導主事、宮崎主事） 辰野高校３名、箕輪進修高校２名、上伊那農業高校４名、駒ケ根工業高校３名
傍聴者	傍聴８名（オンライン含む）、報道６社
会議事項	（１）第 12 回上伊那総合技術新校再編実施計画懇話会まとめ （２）第５回校地検討会議の報告 （３）「上伊那総合技術新校（仮称）再編実施計画懇話会」のスケジュール （４）学校像のイメージ（案）について　　（５）意見交換
当日資料	第 12 回懇話会（資料）、意見交換ワークシート

主な内容（意見及び発言等）

（１）第 11 回上伊那総合技術新校再編実施計画懇話会まとめ

前回懇話会での意見交換の主な意見・発言の確認。グループ討議で出された意見の確認。

（２）第５回校地検討会議の報告

（３）「上伊那総合技術新校（仮称）再編実施計画懇話会」のスケジュール

（４）学校像のイメージ（案）について（事務局より説明）

学校像のイメージのたたき台に対するご意見、これまで懇話会で出された意見を踏まえた学校像のイメージ（案：事務局作成）を説明。

（５）意見交換

グループごと事務局から説明された学校像のイメージの原案について意見交換。事務局員が進行し、全体で発表。

（意見交換の概要）

・イメージは誰に向けたものなのか。県議会提案のイメージ図と、中学生・保護者向けのイメージ図を別個に考えることが必要ではないか。
・イメージ図は見やすくなったが、イメージ図だけでは分かりにくい。資料に掲載する図を片側に寄せ、その脇に説明を残すなどした方がよい。
・イメージに「新校の魅力」をだせるようにしてほしい。
・今までの懇話会で検討した内容、議論してきた内容をどのように実現するのか。
・「学びを深化させるシステム」というが、実現が可能なのか。カリキュラムや教員の確保など実現可能なのか。
・「リスキリング」「リカレント」は、どういう経緯で入ってきたのか。社会人が高校卒業後に学ぶということか。
・表現を精査する必要を感じる。
・ミックスホームルームは互いに刺激し合って確かに良いが、授業は学科毎に進む。異なる学科が一緒になって可能なのか検討が必要。
・学びだけではなく、中学生がわくわくする要素も必要ではないか。
・キャッチフレーズを考えるのが難しい。
・キャッチフレーズとしてあまり固い内容だと頭に入ってこないので、柔らかい表現を。

今後の検討事項

◎事務局から学校像のイメージの原案を提案する。

その他

【次回】　日時、場所：未定

内容：新校の学びのイメージについての意見交換

資料２

第 12 回上伊那総合技術新校再編実施計画懇話会（R５．６.19）グループ討議記録
（意見交換シート記述も含む）

・学びのイメージ（案）について　　〇新校のキャッチフレーズについて

グループで出た意見	
A	・今までの懇話会で検討した内容、議論してきた内容を尊重すべき。『専門的』な学びと同時に、『融合』のキーワードを。 ・教える側（教師側）の、『資質は保証できるのか』。これに対してはグループ内から、『それは県が考える（教員採用・教員配置・教員研修を）事ですよね』と確認発言あり。 ・他の再編校との関連・関係、特に赤穂新校の総合学科との関連・関係性。懇話会の検討・議論を守った県議会提案をすべきである。 ・イメージ図が逆に判りにくくなった。 ・各学科の内容を明示し、難しい言葉をかみくだいて表現してほしい。 ・カタカナ表示では伝わりにくい。 ・補足説明ありきでの（案）では不安 ・所見では内容が伝わり切れない。 ・地域〇〇科という表現はどうかと思います。 ・学びのイメージが理解できる案としてほしい。 ・技術新校としての学べる内容（カリキュラム）を明確とする。 ・これまでの議論を大切にして欲しい。 ・土木~観光等をもう少し整理すべき。 ・学びのプラットフォーム（素々案）は残すべき（※注：前回案の枠内）。 ・新校の特徴、これまで議論してきたもの。 ・カタカナはわかりやすい言葉に代える。 ・学科の内容を明記（今回イメージ図の「学科イメージ」の〇の所に吹き出しのようにして各学科の説明を書く）。 ・3 年間では時間が足りない。 ・卒業して社会に出てから専門的に学べば良い。なので、学生の間は工業の楽しさ（ものづくり）、農業の必要性、商業の大事さを学べば良いのでは。 ・社会に出てからでも遅くはない。 ・頭でっかちにならない様に学ぶ。 ・つめ込みすぎると先生も大変なのでは？ ・土木・建築等の科目は案として出ているが、農×工×商が現実的なのではないかと思う。 ・いくつかの科が融合して学んでいく、そんなイメージを大切にしたいですね。 ・あとは外国語の表記を日本語でわかりやすくした方がいいかな。 〇「上伊那発の即戦力となる“ひと”の育成」 〇「専門性を磨き夢の実現に挑戦できる学校」 〇「農・工・商の学びの追求を融合で地域と自身のみらいをデザインできる高校」 〇必要なのか？ 〇「夢のある地域みらい技術新校」 〇「地域とともに未来を創る 技術の学びの拠点」→赤穂総合学科のｷｬｯﾁﾌﾚｰｽﾞとセットでの PR
B	・学校のイメージ図はすっきりしたが、まだ語句が難しい(中学生やその保護者に向けては) 例）「ウェルビーイング」、デュアルシステム(➡校外での実践的な学び)の解説をいれる。 ・３学科が残ることは良いが、専門性が全く分からない。 ・どのように生徒に選んでもらうか。 ・ミックス HR 大賛成。学びのプラットホームと同様なぐらい円の真ん中に記入すべき。 ・地域デザインは農業ではなく、商業ではないのか。 ・伊那新校が進学校なら、技術新校は資格取得を目玉にしては。 ・専門性とともに、基礎的な部分を確実に学べる場に。 ・農業の命に学び、命を育てるイメージが良い。 〇「未来を担える人間育成」
C	・具体的に学べるものの内容をはっきりさせた方がいい。（例）〇〇検定、〇〇資格 ・前回の方が見やすかった。 ・学ぶこと以外にも、部活動や学校行事、生徒会にも少しふれるだけでイメージが変わる。中学生がワクワクする要素は勉強以外にある。

	・育つ力は「育てる生徒像」と「目指す学校像」に似ているため、不要。 ・学校を最終的に決めるのは中学生なので、分かりやすい内容がよい。 ・イメージ図だけだと何をやるか、何ができるのか分からない。 ・融合させた課題研究で何ができるのか。 ・前回のものをすっきり見せた方が見やすく分かりやすい。 ・課題研究という言葉を知らない人が多いのでは。 ・中学生に興味をもってもらえるような資料作り。 ・図にまとめたことはよかったが、具体的でなくなり、中学生や読む人からすると伝わりにくくなった。 ・図を細かくし、吹き出しなどに「～なことが学べる」など学科の説明を入れるといい。 ・「学びを深化させるシステム」の５つについて解説があるとわかりやすい。 ・イメージ案自体は、一つ一つ区切られていてとても見やすくなった。 ・他の新校と同様、難しい言葉のところに図やイラストがあるといい。 ・地域との連携・協働をすることによって、どのようなことが可能になるのか。またそれをすることにより他校とは違う注目されるような何かができるのか。これについて説明がされるといい。 ・図だけになってしまうと具体が見えにくい。農業+工業でどんなことが考えられるのかイメージがわかない。 ・リスキリング、リカレント、聞き慣れない言葉は説明が必要になる。 ・ものづくり、くらしと比べ、デザインは異質なイメージ。 ・詳しいカリキュラムまで踏み込めないのはわかるが、理念や概念的な文言が多いとわかりにくいものとなる。ある程度の具体が欲しい。 ・実際に新校では何ができるのかわかるものであって欲しい。 ・学びのプラットホームでは何ができるのかわからない。 ・３つの円のイメージはわかりやすいが両端のスペースがあるせいか淡泊。３つの科を前面に出したい。三業（農工商）と産業をかけるとか。 ○「信頼され親しみのある学校。多様な個性とともに夢をおいかける高校。」 →多様な科目やコースを選択し、個性が長所を伸ばしながら将来の目標や夢に近づいて欲しい。 ○「地域で学び、自分と地域をデザインする。」 →地域で学びながら自分の個性を探したり、自分を成長させていくとともに、地域のことも学び、自分なら何ができるか地元を良くする案を考えられるような人になって欲しい。 ○「地域と共創、学びの融合、認め合う新学科」 ○「社会性を育み、未来をつくる高校」 →育てる生徒像・目指す学校像より、地域や社会との関わりを大切にするのがよいと思った。 ○「自ら学びをつくり地域を創造する若者を育てる三科連携型の専門高校。」 ○「農・工・商の学びをいかし、地域と共創する学校」→融合してしまうとイメージがわきにくい。 ○「専門性を高めるとともに多様な学びで地域の未来を切り拓く力がつく高校」 →多様な学びの選択はできても、専門的な知識はつけれる高校であってほしい。 ○「地域の将来をデザインできる人材が育つ学び舎」→産業界からの期待 ○「私の個性を生かす　上伊那の将来へつながる三業（農工商）の学び」 ○「私のやりたいと実現！　上伊那の将来へつながる三業（農工商）の学び」
D	・プラットフォーム内のリスキリング、リカレント教育は誤解が生じる。 ・光ったところを出さないと生徒募集につながらない。 ・専門性を磨く学校を強く出すことが進路選択に重要。 ・目指す学校像のウェルビーイングの図や地域・社会のみらいを創造、を図に入れるとよい。 ・『学びを深化させるシステム』について、今あるシステムに当てはめることばかりを検討していたのでよいキャッチフレーズや、育てる生徒像、目指す学校像をいくら考えても、今のままの高校だな～と感じた。（「これは無理だよね」という声が多かったと思う） ・東大の先生とお話する機会があり『単位』が高校生の学びの豊かさを奪っている、と聞き納得した。第８回くらいに検討すべき内容かと思うが『本当に高校生が主体的に学びを深化できるシステム』をグローバルな視点から考えられるとよいと思った。 ・シンプルにまとめられてよいと思う。 ・融合と専門性という相反するポイントのバランスが必要だが難しい。 ・目指す学校像をイメージ図に示したい。 ・『学びのプラットホーム』と『各科の学びを活用・融合した課題研究』を入れ替える。

資料２

	・深化させるシステム⇒『新たな単位認定』はなにか。 ・リスキリング、リカレント教育は誤解を生む。学び直しは中学生には不要。就労と学習を反復する。 ・ミックスホームルームは期待する効果は少ないのではないか。（例）辰野高校商業科普通科１年生３０コマのうち２０コマがミックス講座。１０コマの違いでは子どもの特性は育ちづらい。 ・リカレント教育・リスキリング教育の主体が判りづらい。 ・前向きな姿勢が最も重要である。そのような生徒が選択する学校を理想とします。 ・ある程度覚悟を持って入学してほしい。 ○「新しい時代を築く○○」→専門性を磨く、技術・技能の取得 ○「わたしって『いーな！！』」→伊那の、すばらしい『人・物・事』を通して自分自身のよさを育む学校」であってほしい。『いーな！！』を生徒が自信をもち発信できる学校であってほしい。 ○上農さんの「わたしと伊那谷をデザインする」はすばらしいと思う。→「地域」とか「伊那谷」とか「上伊那」とかは大切だと思う。キャッチフレーズはブランディングにつながるのでプロに作ってもらったほうがよい。 ○「『専門×連携×協働』でいきいき・わくわく上伊那のみらいを創る学舎（まなびや）」 →言葉の通り、いきいき・わくわくする学校。上伊那のこれからを創る学校。専門と連携と協働を新校では中心に据えたい。 ○「農・工・商の学びを通じて未来をデザインする」→各科の学びで自分自身のみらいをデザインできる新校の魅力を表現。 ○「３年間で５年間の学びを習得できる密度の濃い学校」→文字通り、専門を核に専門外の学習にも触れる機会を用意できる学校という意味合い。ただし、生徒のがんばり次第。

資料３

上伊那総合技術新校　懇話会でのご意見に対する検討の方向性について

	これまでの懇話会での意見	あり方・方向性
目指す学校像・	○自分の興味関心を深め、好きを探究することができる学校 ○小・中学校での探究を引き続き取り組める学校	◇「好き」や「楽しい」、「なぜ」をとことん追求できる探究活動の実践
	○障がいを持つ方も含めた、多様な人が来たくなる、来やすい学校 ○ジェンダーレスの学校	◇多様性を認め、学校関係者の well-being（幸せな状態）を実現
	○地域に根付き、社会で活躍する人を育成する学校	◇地域は上伊那に限定するのでなく、地元の発展を担う人も含め、広い地域で活躍できる人を育成
	○農・工・商の連携により、化学反応が起こる学校	◇学科の枠を越えた、農・工・商の学びの展開
	○人間性（協調性、積極性）を高めることができる学校	◇他者との協働を積極的に展開
	○体験型の学びを実践する学校	◇学校内外で学ぶ仕組みを構築
	○育てる生徒像と目指す学校像のリンクや主語を確認してほしい ○カタカナやわかりにくい表現を少なくする ○みらいをデザイン、みらいとはなにか	◇中学生やその保護者にわかるような表現にする ◇将来をデザインできる生徒をイメージしている ◇自らの人生と今後さらに急速に変化する社会を想定
育てる生徒像	○社会性を持つ生徒の育成 ○他者と協働できる生徒の育成 ○周囲の人々と協力しながら社会を創っていこうとする生徒の育成 ○主体的に行動でき、コミュニケーション力や表現力を持つ生徒の育成 ○周囲の人々と協力しながら社会を創っていこうとする生徒の育成 ○リーダーとして活躍できる生徒の育成	◇農・工・商・情報の活用等の学びや特別活動を通じて育てる
	○専門分野の枠を越えた職業能力を持った生徒の育成	◇農・工・商・情報の融合の学びで実現
	○データ活用ができる生徒の育成	◇情報技術はすべての生徒が身に付けられるようにするまた、特化して学べるようカリキュラムの工夫を検討
	○幅広い視野を持った生徒の育成	◇学科の専門性にとらわれない学びの仕組みの研究
	○専門的・基本的な知識・技能を身に付けた生徒の育成	◇基礎的な学び（コア）とより専門性を高めたり、幅広い技術を身に付ける学び（オプション）を用意
	○自己肯定感を高められる生徒の育成 ○人間性の高い生徒の育成	◇農・工・商の学びや特別活動を通じて育てる ◇知識偏重でなく、体験から学ぶことができる機会を準備
	○起業できる生徒の育成	◇起業教育（アントレプレナー教育）の展開を検討
	○育てる生徒像を読んでも、「総合技術新校」の学校像の特長がない	◇学校の外部環境や内部環境の客観的特長や事実の強み、それらを活用、発揮した活動によって生徒への教育成果が伝わるよう検討

資料３

	これまでの懇話会での意見	あり方・方向性
新校での学び（設置学科）等	○総合技術学科（仮称）のような、ひとまとめの学科	◇総合技術高校では、専門性を担保するために、農業科、工業科、商業科の設置を構想している
	○情報関連の科目がトレンド ○情報系学科の設置	◇すべての生徒が情報技術を身に付けられるカリキュラムを工夫していく ◇工業科に、情報技術系の学びを設置けることを検討
	○土木系・建築系の学びの設置	◇学びの中に位置付けることを検討
	○農・工・商をブレンドした学科	◇農工商、共通な学びを検討
	○３学科融合がピンとこない ○融合した学びであっても、どこに軸足を置くかが大切 ○新学科⇒融合の学びが何になるか答えがない	◇学校とともに、今後さらに検討していく
	○電気系を電子系と電力系の２つに分ける ○機械、電気、情報、蓄電池や半導体関連を学ぶことができる学科	◇コースや科目の設置を検討
	○起業家学科、アントレプレナー学科の導入	◇コースや科目の設置を検討
	○各々の学科がつながり、連携をとる横断的な学びが必要	◇学科間の連携や融合は、総合技術高校のコンセプトの根幹
	○体験的学習の充実した学び	◇どの学科にも体験を取り入れた学びを展開デュアルシステム等の導入を検討
	○アパレルデザイン、ゲーム・音楽などのデザイン、語学力をつけるような学び	◇地域との連携や外部人材の活用も視野に入れ、検討
	○地域に少ない産業を学べる学科等　土木、建築、繊維、観光関係	◇学びの中に位置付けることを検討
学びを支えるために考えられる取組	○入学後でも、学科を決められる ○科を越えたくくり募集で、入ってから科を選べる仕組み ○個々の希望や興味・関心などによって、様々な授業を選択できるようにする ○１年次は普通科の授業を充実させ、キャリア教育的な時間（農業・工業商業を体験的に学べる）を組込みながら、１年次の後半から、生徒の興味・関心がある学科等の選択を促す	◇専門性の担保と入学する生徒の実態を考慮しつつ検討
	○１、２年生に体験的学習を多く盛り込めるカリキュラムがよい	◇すべての学科にも体験を取り入れた学びの展開を検討
	○コース学習の中で探究的な学びができる教育システムの検討	◇探究的な学びは新校でも重視
	○デュアルシステム等、地元企業と連携した取組み ○スマート農業や自動化に向けた社会のために地域の方と取り組みたい ○地域の企業、商店、農家で実習学習する中で協働して課題解決 ○地域企業、自治体等と連携した地域課題の解決 ○信州大学、南信工科短期大学校などの学術機関との連携 ○地域企業、自治体等と連携した地域課題の解決 ○深い学びのために、地域の企業が入り込む仕組み ○上伊那地域全体での交流に期待 ○今の延長線上で、さらに地域の方々にかかわりを持ってほしい ○地元企業、地域人材にも目を向けた学び	◇専門教育には、地域との連携が必須「共学共創プラットフォーム」を構築し、連携を図る方向

資料３

	これまでの懇話会での意見	あり方・方向性
学びを支えるために考えられる取組	○３科連携した課題研究の実施 ○専門科 25 単位（最低）の上で、連携を図る農・工でものづくり、商で売る ○異分野との交流 ○農工商の科目に触れることは経験を増やすという意味では有意義だと思うが、反面、中途半端になるのではないかという危惧がある	◇総合技術高校では、農、工、商のそれぞれを極める生徒も、幅広く学ぶ生徒もいてよいと考えており、個々の生徒の希望がかなう仕組みの検討 ◇専門性の追求は必須
	○どの科に所属していても、取りたい資格が取れる環境	◇総合技術高校のメリットとして、積極的な環境整備を検討
	○地域とつながるコーディネータの設置が不可欠	◇県教委でもモデル校を設け検討 ◇自治体等とも相談していきたい
	○人気の科は希望者が多いが、人数調整するのでなくできるだけ望んだ学びを保障してほしい	◇現行制度下で可能な方策を検討
	○談話スペースや話し合える場がほしい	◇施設整備については、議会同意後に検討開始改めて意見交換する
	○学びを考えていくために、どのような制限があるか	◇専門学科は、25 単位以上の専門科目の修得が必要 ◇上伊那の各校の特色も踏まえた学びの構築が必要
	○制服に対する意識が中高生を中心に大人が思っている以上に高い ○登校時間を考えてほしい ○クラブ活動にも力を入れてほしい	◇学校運営や生徒会活動、部活動についても順次検討
	○学校に通えなくなりそうな生徒のフォローできる体制	◇生徒の心のケアやインクルーシブ教育等を考慮した学校運営を検討
	○「個別最適な学び」を実現するための教員の確保が必要	◇教員数の確保も必要
	○海外との交流をもっと盛んにしてほしい ○国際交流、留学制度はよい ○言葉の壁（英語等）を越えて、自由に外国とコミュニケーションが取れる環境	◇地域（自治体等）とも相談して進めていきたい
	○県外からの募集も視野に入れた受け入れ態勢（寮など）の検討	
	○一度外に出ても帰ってこられる環境・地域の魅力づくり ○Uターン、残る人を育てる観点 ○地域社会が生徒を縛り付け過ぎない環境を用意してほしい	
イメージ図（案）について・	○イメージは誰に向けたものなのか。県議会提案のイメージ図と、中学生・保護者向けのイメージ図を別個に考えることが必要ではないか	◇わかりやすいイメージを目指すが、まずは、県議会提案のイメージ図を考えていきたい
	○イメージ図は見やすくなったが、イメージ図だけでは分かりにくい。資料に掲載する図を片側に寄せ、その脇に説明を残すなどした方がよい	◇イメージ図はシンプルにしつつ、必要なところは説明を入れていきたい
	○イメージに「新校の魅力」をだせるようにしてほしい	◇言葉だけではなく、上伊那で生徒を育てることをイメージした図にして提案していきたい

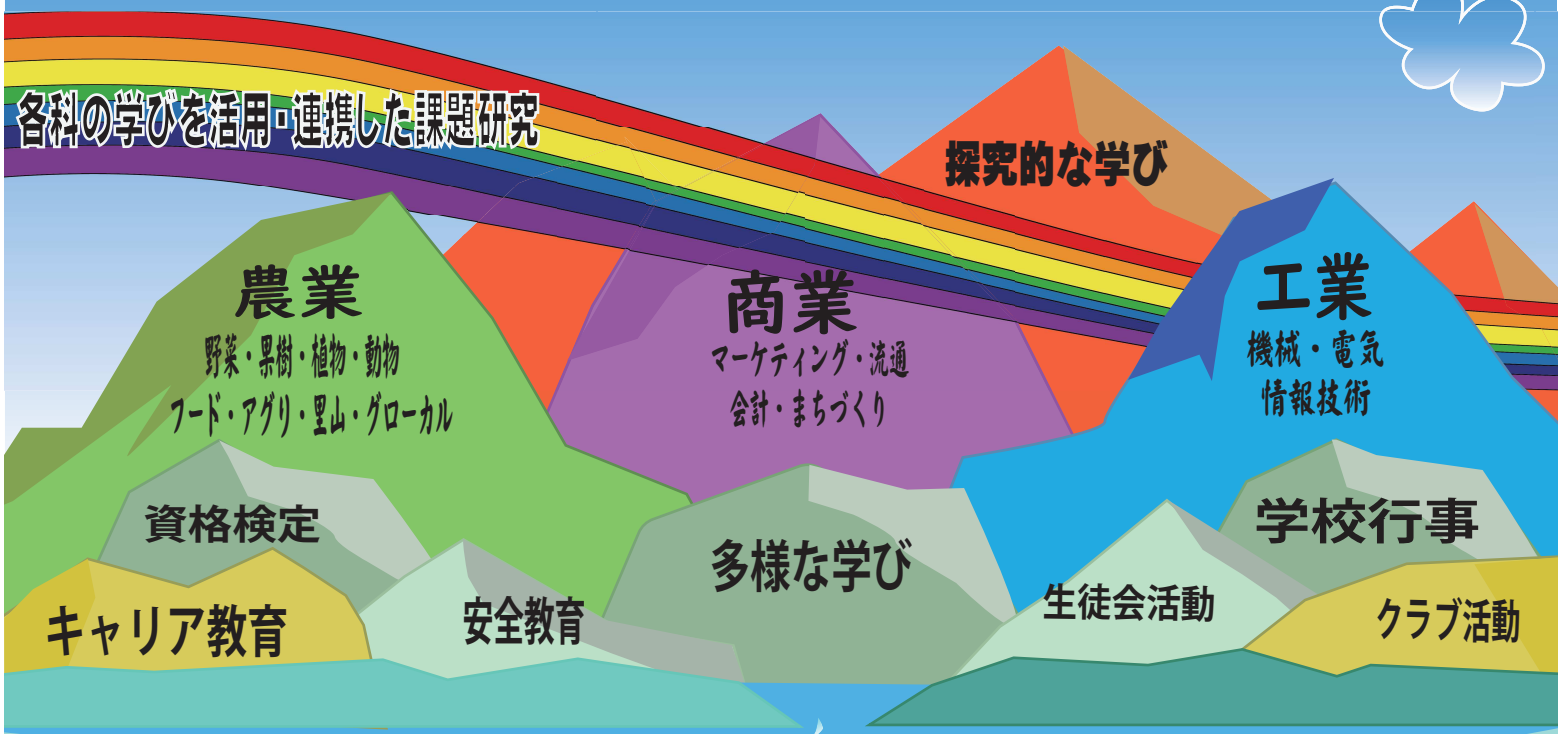
資料３

	これまでの懇話会での意見	あり方・方向性
イメージ図（案）について	○今までの懇話会で検討した内容、議論してきた内容をどのように実現するのか	◇ご意見を基に、３つの学科の専門性を担保しつつ、３科が連携・融合した上伊那総合技術新校をイメージした
	○「学びを深化させるシステム」というが、実現が可能なのか。カリキュラムや教員の確保など実現可能なのか ○ミックスホームルームは互いに刺激し合って確かに良いが、授業は別個に進む。異なる学科が一緒になって可能なのか検討が必要	◇具体的な運営方法等は、今後の検討 ◇上伊那で目指す、専門性を担保した上で、３つの学科が連携、融合した上伊那総合技術高校のコンセプトを実現する大事な取組と考えている
	○「リスキリング」「リカレント」は、どういう経緯で入ってきたのか。社会人が高校卒業後に学ぶということか	◇開かれた学校という意味で、社会人が学ぶ場所があってもよいかという思いがあるが、具体的な取組については今後、検討していく
	○学びだけではなく、中学生がわくわくする要素も必要ではないか	◇これまでのイメージ図にない特別活動（生徒会、部活動）の要素も入れた ◇地域全体がフィールドとなるイメージを文字情報だけでないデザインで表現した
	○キャッチフレーズを考えるのが難しい ○キャッチフレーズとしてあまり固い内容だと頭に入ってこないので、柔らかい表現を	◇「みらいをデザイン」することが大切だと意見が出ていたので、このフレーズを大切にして、「自己を磨き、みらいをデザインする力を育てる高校」とした

資料４

上伊那総合技術新校学校像のイメージ

自己を磨き、みらいをデザインできる力を育てる高校



学びを支えるデュアルプラットフォーム

上伊那地域共学共創プラットフォーム

地域の活性化や地域の課題解決、イノベーションを創出できる生徒を上伊那で育てるためのコミュニティ

上伊那広域連合
各市町村
産業界
地域連携コーディネータ
企業
幼保小中高大特支
JICA

学びの連携プラットフォーム

興味・関心によって、他学科・コースの学びを選択し、専門性を深め、幅を広げる

ミックスホームルーム
新たな単位認定
デュアルシステム
プレゼン室
ウエルビーイングルーム（多目的室）
ミニ工房（連携実習室）

【育てる生徒像】
- 上伊那で学び、地域・社会を元気にできるひと
- 専門性・社会性や人間力を育み、地域や自分自身の未来をデザインできるひと
- 多様な人々との協働を通して、主体的に行動し、学び続けることができるひと
- 幅広い視野や、多様な価値観を持ち、学びを活かして、社会に貢献できるひと

【目指す学校像】
- 専門性を磨くとともに、学科の枠を越えた農工商の連携により、新たな価値観を創出し、地域・社会に貢献できる学校
- 多様な生徒が「生き生き」と生活し、個人や社会の「ウエルビーイング」*を実現できる学校
- 生徒が学んだことを活かし、自分自身の将来と地域・社会のみらいを創造できる学校
- 上伊那の資源を学びや体験に活かし、協働的な学び、個別最適な学びを通して、生徒が成長できる学校

*身体的・精神的・社会的に良い状態にあること

デザインは「上伊那で育てる」を中央アルプス・南アルプス・天竜川でイメージしています

資料５

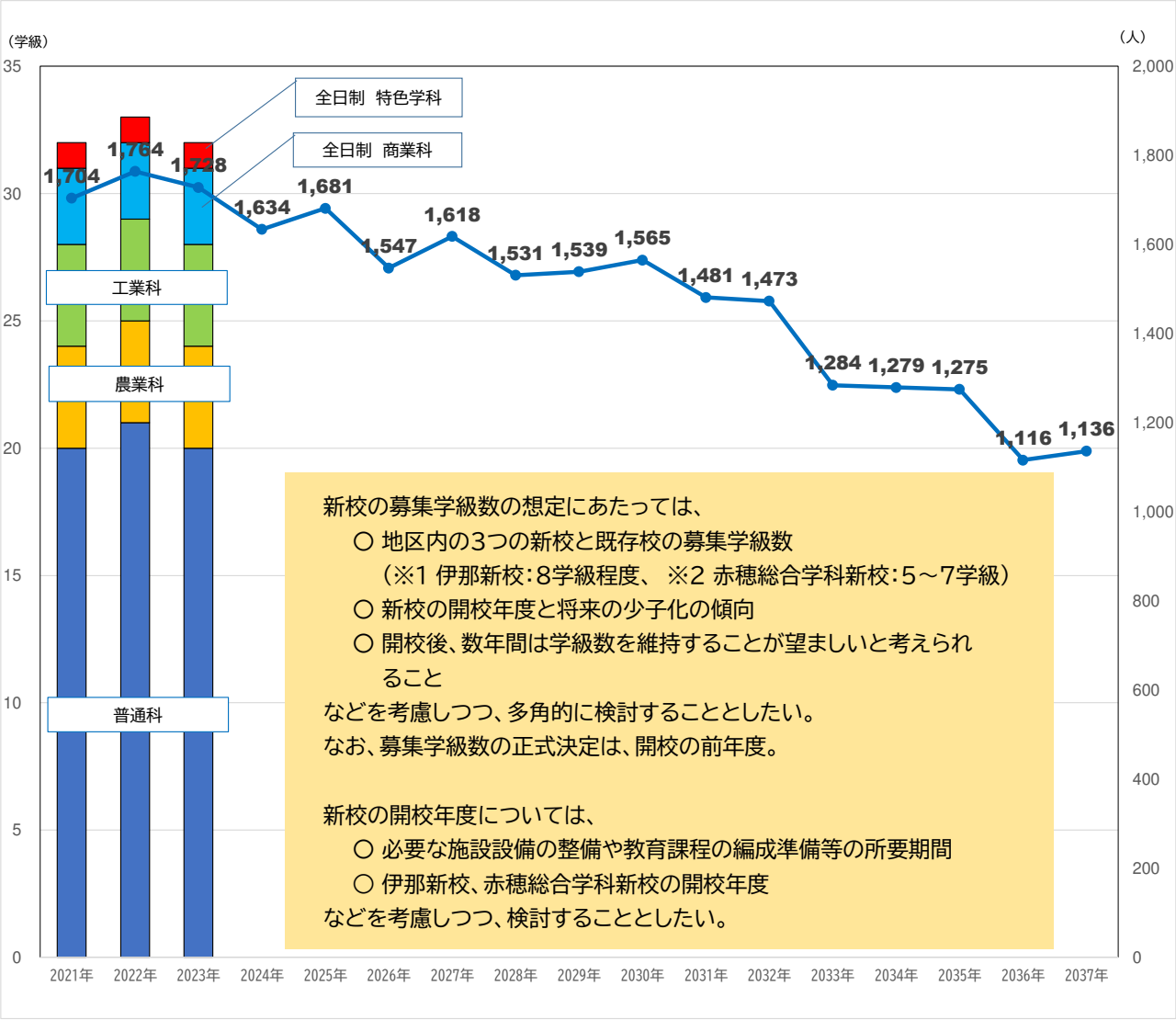
上伊那地域の中学校卒業予定者数の推移（見込）

出典：　2021年～2032年　文科省学校基本調査（令和5年5月1日現在）
　　2033年～2037年　長野県人口異動調査（令和5年4月1日現在）

			高3	高2	高1	中3	中2	中1	小6	小5	小4	小3	小2	小1	年長	年中	年少	2歳	1歳
入学年度			2021年 R3	2022年 R4	2023年 R5	2024年 R6	2025年 R7	2026年 R8	2027年 R9	2028年 R10	2029年 R11	2030年 R12	2031年 R13	2032年 R14	2033年 R15	2034年 R16	2035年 R17	2036年 R18	2037年 R19
上伊那地域（旧8通）			1,704	1,764	1,728	1,634	1,681	1,547	1,618	1,531	1,539	1,565	1,481	1,473	1,284	1,279	1,275	1,116	1,136
			前年比	+60	-36	-94	+47	-134	+71	-87	+8	+26	-84	-8	-189	-5	-4	-159	+20
県立高校の募集学級数	学校別	辰野	3	3	3														
		箕輪進修	3	3	3														
		上伊那農業	4	4	4														
		高遠	3	3	3														
		伊那北	6	6	6					※1									
		伊那弥生ケ丘	5	6	5														
		赤穂	5	5	5						※2								
		駒ケ根工業	3	3	3														
		募集学級数 計	32	33	32														
	学科別	全日制及び箕進Ⅰ部Ⅱ部 普通科	20(228)	21(232)	20(228)														
		農業科	4 (25)	4 (25)	4 (25)														
		工業科	4 (35)	4 (34)	4 (34)														
		商業科	3 (26)	3 (26)	3 (24)														
		総合学科	0 (24)	0 (24)	0 (24)														
		特色学科	1 (17)	1 (17)	1 (17)														

※（　）は全県の学級数

新校の募集学級数、開校年度の考え方について



新校の募集学級数の想定にあたっては、
- ○ 地区内の3つの新校と既存校の募集学級数
  （※1 伊那新校：8学級程度、 ※2 赤穂総合学科新校：5～7学級）
- ○ 新校の開校年度と将来の少子化の傾向
- ○ 開校後、数年間は学級数を維持することが望ましいと考えられること

などを考慮しつつ、多角的に検討することとしたい。
なお、募集学級数の正式決定は、開校の前年度。

新校の開校年度については、
- ○ 必要な施設設備の整備や教育課程の編成準備等の所要期間
- ○ 伊那新校、赤穂総合学科新校の開校年度

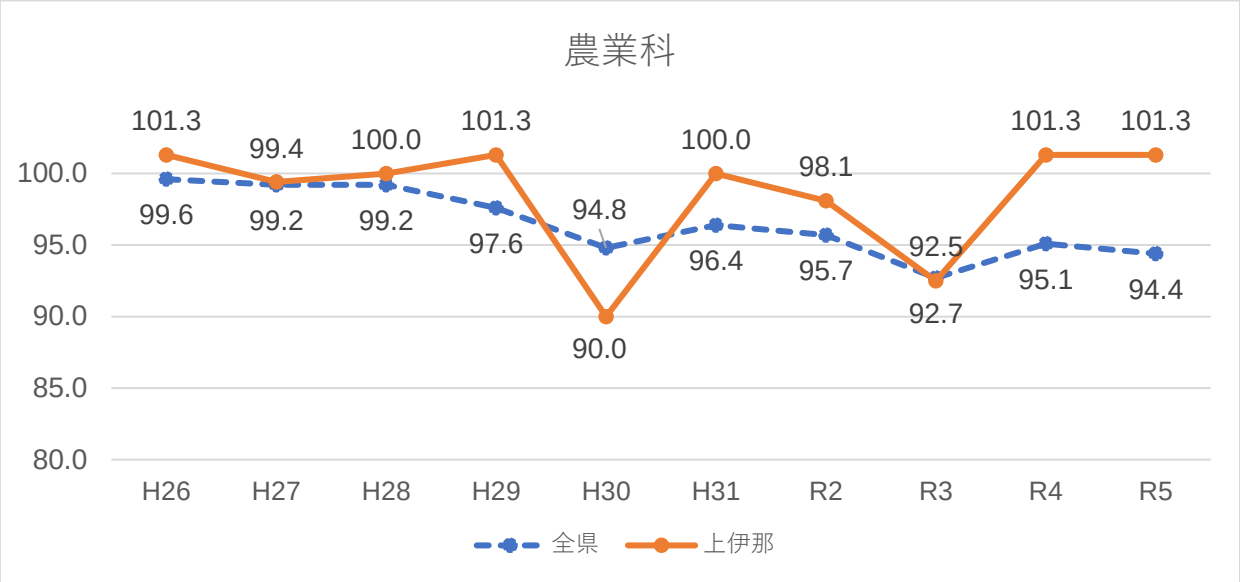
などを考慮しつつ、検討することとしたい。

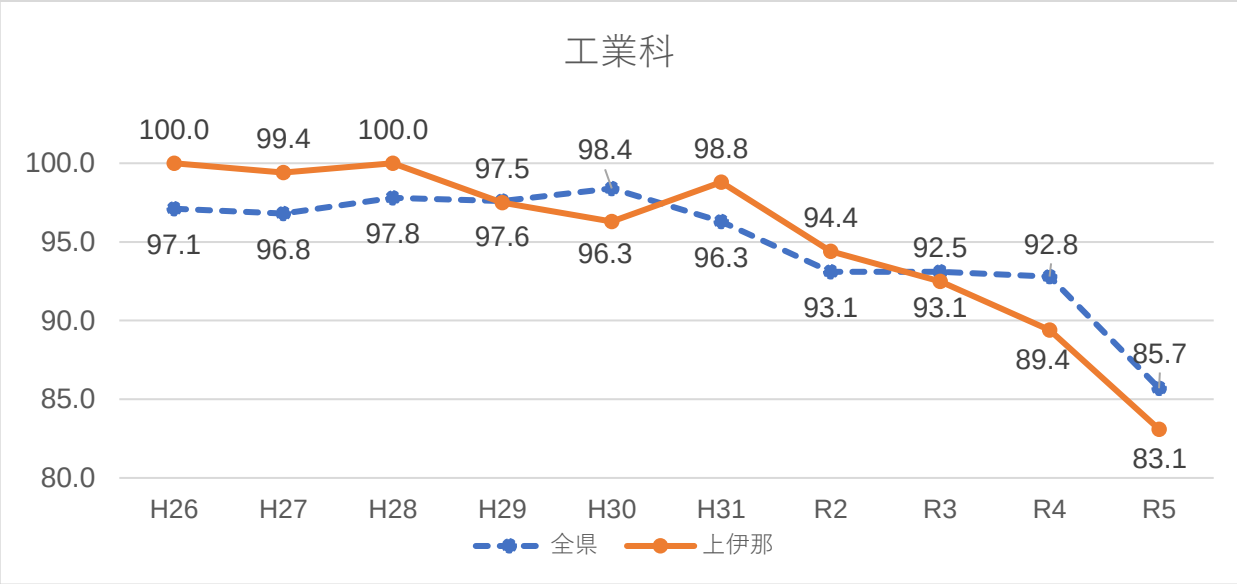
資料６

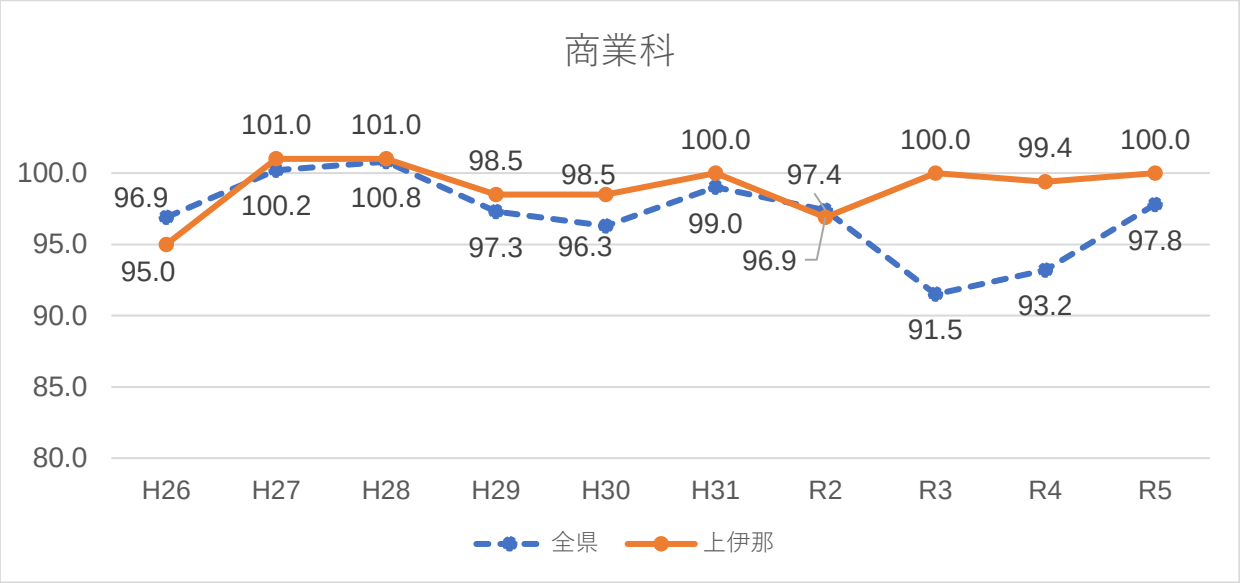
過去10年間の学科別充足率

高校再編推進室

○全日制及び多部制・単位制（Ⅰ部）の充足率（入学者数／募集定員）







資料７

上伊那総合技術新校　校地検討会議からの報告事項

校地検討会議

１　校地選定に係る基本的な考え方

（１）総合技術高校の特性から、校地は一つを基本とする。
（２）現校地を活用することを原則とする。
（３）辰野高等学校、箕輪進修高等学校は普通科単科高校とすることが決定しており、この２校を上伊那総合技術新校の校地とはしない。
（４）校地検討会議及び上伊那総合技術新校再編実施計画懇話会での十分な意見交換を踏まえ、県教育委員会が校地を決定する。

（令和４年 11 月 29 日　第７回懇話会にて報告、了承済）

２　校地検討に係る項目と観点の整理

校地検討会議では、下記の項目と観点から校地を検討する。

（１）　校地・校舎に係る環境

検討項目	検討の観点
敷地（校地）の広さ	○３科それぞれの学びを保障できる広さが確保できるか ○３科連携の学びが実現可能となる施設（実習地、実習施設）の整備ができるか
部活動の活動場所の確保	○部活動の活動場所が十分確保できるか
駐車場施設の確保	○地域・企業からの来校者、行事等の際の保護者の駐車場は十分に確保できるか
周辺の道路環境	○大型バスや訪問者が訪れやすい道路環境があるか
近隣住民への影響	○学校での活動による騒音等の影響はどうか

（２）　通学環境

検討項目	検討の観点
駅からの距離	○最寄り駅からのアクセスが容易か
通学時の安全性	○徒歩・自転車による通学の安全性が確保されているか
上伊那全域からの通学のしやすさ	○各地からの通学時間はどうか ○交通手段の利便性はどうか

資料７

（３）　学校を取りまく教育環境

検討項目	検討の観点
他の学校等（幼保小中高大）との交流の利便性	○交流が想定される他の学校等との距離や位置関係はどうか
地域（企業・自治体・教育機関等）との連携の利便性	○交流や連携が想定される地域の企業・自治体・教育機関との距離や位置関係はどうか
周辺の学習環境（自学、自習スペース）	○近隣に放課後の学習環境等があるか
近隣施設の利便性	○生徒の発表等で活用が想定される公共施設等との距離や位置関係はどうか

（４）　その他

検討項目	検討の観点
地区内の高校配置のバランス	○再編後の上伊那県立高校６校の配置はどうか
他地区（旧他通学区）との高校配置のバランス	○諏訪地区、下伊那地区、木曽地区、塩筑地区の専門学科設置校との距離はどうか
まちづくりとの関連	○自治体が計画するまちづくりのゾーニングや土地利用規制はどうか
（校舎工事期間における生徒の学びの保障）	（○開校までの校舎工事期間における生徒の学びへの影響はどうか）